

石井 忠<sup>1</sup>: 蒙古襲来絵詞の“てつはう”Tadashi ISHII<sup>1</sup>: Tetsuhau painted on Moko-Shurai-Ekotoba

長崎県北松浦郡鷹島町は九州北西沿岸に位置し伊万里湾入口にある。島は東西5km、南北約13km、面積約17km<sup>2</sup>。高所は南部に牧ノ岳117m、北部に、宮地岳116.5mを有する。玄武岩からなる低平な島である(図1)。産業は漁業が主であり、近年は養殖漁業も盛んである。他に玄武岩を墓石とした阿翁石が知られる。島名の鷹島は13世紀末の蒙古襲来絵詞に仮名で「たかしまのにしの浦」と見え、鷹島の漢字がいつ頃からあてられたかはわからない。伊能忠敬の測量の際には「鷹島」とある(鷹島町郷土誌編さん委員会1975)。

玄界に点在する島嶼の一つであるが、この島を著名にしているのは二度にわたる元寇である。特に弘安四年(1281)閏7月1日に、この海域に集結した元船約4,400隻をが台風(後世のいわゆる神風)の直撃を受け、多くが沈没したところとされる。島内には当時の激戦を物語るように、首除、伊野利(祈り)の浜、刀の元、供養の元、地獄谷、首崎、血崎、血浦、胴代、鬼塚、遠矢の原等の名が残っている。その後、島周辺から時折漁船の網に壺(唐壺)や刀剣、仏像が引き揚げられ、話題となつた。しかし一部には海底に弘安の役の沈没船が眠っているのではないかと言われていた。

1970年代頃より東アジアにおける沈没船の引き揚げが盛んになった。1973年中国・福建省泉州湾の沈没船の引き揚げ、1975年には韓国・木浦の新安沖の沈没船から膨大な量の白磁や青磁が引き揚げられ、これらが水中考古学を大いに刺激したと言われている。

1974年(昭和49)、鷹島の神崎地区で貝掘り中の島民が元代、パスパ文字の青銅製印鑑「管軍總把印」を発見し注目された。

1981年から82年まで文部省科学研究費特定研究による「水中考古学に関する基礎的研究」が鷹島沖で実施された。81年には鷹島南岸の東の千上鼻から西の雷岬までの延長7.5km、汀線より沖合約200mまでの範囲に含まれる1,505m<sup>2</sup>が「周知の遺跡」として登録

された(図1)。「周知の遺跡」での開発は事前の発掘調査が義務づけられ、工事に伴う緊急発掘調査が行われるようになった。1983年7—9月、島の西寄りの床浪港地区を皮切りに調査が行われた。1986年には九州・沖縄水中考古学協会が設立され、鷹島町教育委員会との共同で指定地区護岸、防波堤設置の度に調査が行われている。現在まで、人骨、甲冑、武器、銅錢、装飾品、陶磁器、磚、碇石、船材等が発掘されている(鷹島町教育委員会2003)。

## “てつはう”的発見

1992年6月28日、長崎県北松浦郡鷹島町床浪の工事に伴う海底調査を見学した。調査船に乗り母船に着き午前10時頃から海底調査が行われた。潜水具に身を固めた調査員たちは、各自が分担された海底へ潜っていった。船上には私と楠本正氏と新聞記者氏の3人だけとなった。炎天下に3人は海面に浮き上がってくる泡を見るだけだった。調査海底は深さ15m、1時間の調査ですぐには浮上できず段階的に体をならして浮上してくる。海底は

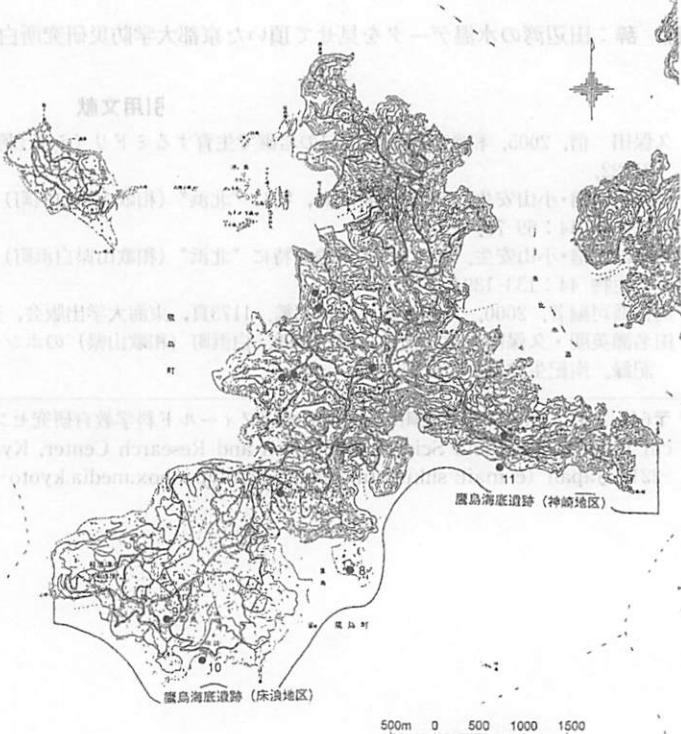


図1. 鷹島全図。

東千上鼻から西雷岬の「周知の遺跡」

10. 床浪遺跡 11. 神崎地区(鷹島町教育委員会)。

ヘドロが厚く堆積して調査は難航とのことであった。この時出土した陶磁器片は数片であった。昼頃までに全員が浮上し、神崎漁港に戻った。

午後再び調査が行われるが、私たち3人は船には乗らず、漁港近くの神崎の浜を歩いてみた。潮は大潮に近い状況で護岸から15-20mにわたって礫質が現れていた。すべて礫と思っていたら、炎天下に乾燥し、海藻や貝殻が付着しているが、明らかに礫と異なる褐色や白っぽい陶磁器片らしいものが見えるようになった。また鷹島の資料館に展示されている褐釉壺片や磚（せん、煉瓦）、青磁片等もある。

表面にフジツボやカキ殻が付着した直径約20cmの半球状のものを見つけた。中は赤錆びて堅く石化したようになり、泥状のものが詰まっていた。

6月28日の記録ノートには「フジツボ等の付着、鉄製弾らしいものを採集、図に20cm、中央に穴ぼげとし、赤ボイ、円形でなくやや楕円形、重い」と記している。両手に持ち切れないほどの量の陶磁器片を採集、浜に落ちていたビニール袋に入れて資料館へ戻った。1日潜ってこれだけだったと調査の成果を見せてもらったが、表採の陶磁片はそれの数倍はあった。そして、全員この半球状の「物」に注目した（図2、図3）。

九州・沖縄水中考古学会副会長の石原涉氏は、この時のことを「飼料袋いっぱいに詰め込んだ陶片と、見慣れない丸い物を持ってこられた。私は感心するとともに、その丸い物に興味をひかれた。先生は石弾と思って拾つたらしいが、それは半分に割れていて、内側に赤錆がびっしりとついていた。『これは何でしょうね』と問われた。私は『もしかしたら、これが“てつはう”かも知れませんね』と答えた」（石原2005）と述懐している。表採のものは1/2程が残存する。内部には鉄片らしきものが錆びて固まっているのが見られる。復元径4.7cmの孔が僅かに残存している。直径14.7cm、重量2,170g（鷹島町教育委員会2002）。分析は海底から引き揚げられた完形品と半円品と表採品の、計3点であった。

透過X線による非破壊での内部観察と、内容物の材質を知るための蛍光X線及びX線回析調査が行われた。その結果、「表採品では透過X線で固体物が多数詰まっているのが確認され、そのうちの1点は微小領域の蛍光X線分析で鉄が含まれることが明らかになった。また内容物全体の材質調査では、この他青銅の可能性を示す元素も見られた。しかし火薬の有無については不明である」とし、「今回は限られた装置の、限られた条件内で行われた調査であり、得られた結果は不十分なものといわざるを得ない。しかし、その一方で表採品に鉄塊らしき内容のあることが確認されるなどの成果もあった。今後“てつはう”的実体解明に向むけ、より多面的な調査が望まれる」と結んでいる。引き揚げられた完形品と半円品の2点には目に引くような物体は確認されなかった。

#### “てつはう”とは

文永11年（1274）、高麗を発した元・高麗軍（4,900隻）は対馬、壱岐を侵し、10月19日博多湾内に姿を現した。一夜を海上で明かし、翌20日に上陸をはじめ、彼我の間で激しい戦闘が繰り広げられた。伝統的な個人戦主体の日本の合戦とは戦闘形式が異なり、日本軍は苦戦を強いられた。元軍は太鼓をたたき、銅鑼を打ち鳴らし、天地もどよめくほどの鬨の声をあげ、毒を塗った矢を一齊に放ち、集団戦で挑んできた『八幡愚童訓』（桜井1975）。それに日本人が知らない驚くべき新兵器を使った。“てつはう”である。

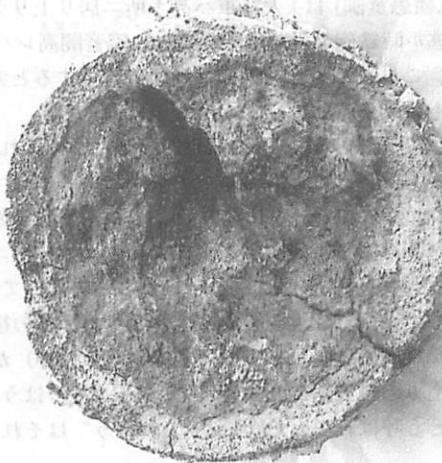


図2. 表採された“てつはう”。

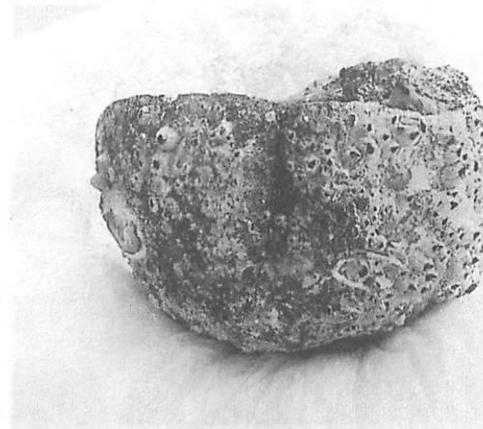


図3.“てつはう”的表面。

肥後の御家人竹崎季長は5人の郎党と共に博多へ馳せ参じた。『蒙古襲来絵詞』(小松1978)には、その雄姿が各所に描かれている。絵詞の圧巻の一つは、槍や矢の飛び交うなかを突進する馬上の季長、愛馬は矢を胴部に数本受け、どっと吹き出す鮮血は砂を染め、馬は後脚をあげて苦悶している。季長は手綱を引き締めて体を屈め踏ん張っている。その頭上に炸裂する“てつはう”は地面に落なし、火を吹き、煙が立ち、飛び散る碎片。元寇を語るとき掲載されている名場面である。

中学や高校の日本史の教科書にも多く載せられている(図4)。

『八幡愚童訓』は「大將軍ハ高キ所ニ居リ上リテ、引ベキニハ逃鼓ヲ打チ、懸ベキニハ責鼓ヲ叩クニ隨テ振舞ト、逃ル時鉄砲ヲ飛シテ暗ク成シ、鳴音蘭高レバ、心ヲ迷シ肝ヲ疮シ目眩耳鳴テ、亡然トシテ東西ヲ不<sup>レ</sup>弁」とある。これをみると、鉄砲は地面に落下すると大音響を発して火が吹き煙が出て、目や耳がくらんてしまうというものである。

『八幡愚童訓』より後の14世紀後半につくられた『太平記』(自—太元—攻—日本—事)にも、愚童訓に似た記述がある。これは同書からの引用であろうか。蒙古襲来を体験した人達にとって“てつはう”は強烈な印象であり、後々まで語られたのではなかろうか。「鼓ヲ打チ兵刃既ニ交ル時鞠ノ勢ナル鉄丸ノ迸ル事坂ヲ下ス車輪ノ如ク、霹靂スル事閃電光ノ如クナルヲ、一度ニ二、三千抛出シタルニ、日本ノ兵多ク焼殺サレ…」とあり、『太平記』では鉄丸が二、三千ばかりとび散っている。“てつはう”が炸裂して碎け散った様子であろうか。

中国で火薬は12世紀後半には発明され、その後改良が重ねられ、戦闘に使われている。13世紀(1221)には金(女真族の建国)によって震天雷(炸裂弾)が使用された。1232年、蒙古が金の南京(河南省)を攻めた時には金軍の震天雷に悩まされている。“てつはう”はこの震天雷である。使用された“てつはう”は南宋では鉄火砲とも呼ばれていたから、“てつはう”はそれに由来するものという(篠田1992;王1999)。



図5. 石弾。

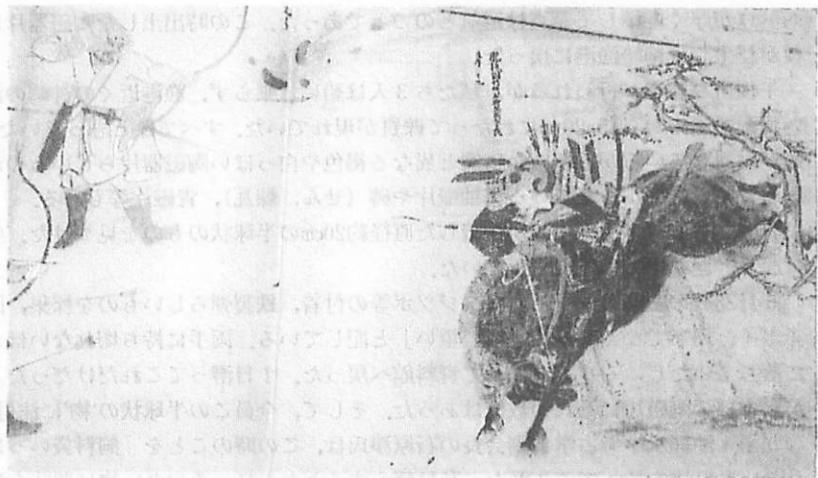


図4. 蒙古襲来絵詞“てつはう”的炸烈。

この“てつはう”をどのようにして飛ばしたかはよく分からぬが、震天雷などは投石機を使って行われている。鷹島からは石弾も引き揚げられている(図5)。石弾は大型で直径15cm 3kg、中型は11cm 1.7kg、小型は8cm 800g(鷹島町教育委員会1992)ある。これらを投擲するには投石機であろう(ターンブル2000)。元船から投石機を使って投擲したか、陸上に揚げて固定したかははっきりしない。陶製の“てつはう”的中央部に導火孔があり、発火して短時間で抛り投げなければならない、もしかしたら投石機のようなものでなく、屈強の大男を使って手投げで抛り投げたことも考えられる。(王1999)では震天雷を「またの名は鉄火炮。古代の火器で、世界史上最早の金属炸裂弾である。外殻は生鉄(錆鉄)による铸造で、罐子式・芦胡式・円体式・合湾式等があり、火薬を内装している。投石機を使って発射するか、あるいは(手で)下から上向きに投擲するが、防御物を爆破し、人馬を殺

傷するだけの威力がある。金の人が真っ先に使用した。(以下略、荒金卓也訳)。」と記している。

ちなみに饅子は陶磁器あるいは金属製の円筒状の器のこと、芦胡は正しくは葫芦で、ウリ科のヒョウタンの類であるから、胴中のくびれた形状の物であろう。今後、投石機などが鷹島の海底から見つかることも期待したい。

### 絵詞の“てつはう”への疑問

『蒙古襲来絵詞』は、肥後竹崎に本拠を持つ御家人、竹崎季長が、元寇の際、博多付近での戦闘に力戦したおのれの軍忠と、その軍忠が確認され、鎌倉の恩賞にあずかり、海東の地頭職を与えられた栄誉の祈念と、甲佐明神に奉納するために描かれたものという。『蒙古襲来絵詞』が描かれてから700年の長い歴史の中で模写されたり、転々と所有者が変わることなどしている。18世紀(1793)には「熊本侯絵詞が江戸に持参、白河侯(松平定信)借之」(小松1978)という事もあって、その頃に加筆されたという説がある。

佐藤(2005)によれば“てつはう”と季長奮戦と前面に立ちはだかる三人の元兵の部分である。墨の線の濃淡と使い方、異様な風貌、兜も他の元兵と異なる。さらに“てつはう”も元軍側から発射すると着弾と火炎、煙は逆ではないか…というものである。佐藤(2005)は江戸のかなり教養のある絵師による加筆ではないかとしている。

約730年前、二度にわたる蒙古襲来、その緒戦で日本軍を震撼させた“てつはう”的一部分が現れたが、まだスタートの段階であり、ナゾも多い。今後の解明に期待したいものである。

**謝 辞:**この稿をまとめるにあたって、九州・沖縄水中考古学協会副会長石原涉氏、古代史研究家荒金卓也氏、西山洋子氏にお世話をなった。厚く御礼申し上げる。

### 引用文献

- 後藤円治・岡見正雄。(校注) 1962. 太平記(三)・日本古典文学大系36. 532pp. 岩波書店、東京。
- 石原涉。2005. 蒙古襲来「てつはう」海底からの検証。銀友34:4。
- 小松茂美編。1978. 蒙古襲来絵詞(日本絵巻大成14), 123pp. 中央公論社、東京。
- 王家范・謝天佑。主編。1999. 中華古文明史辞典. 877pp. 浙江古籍出版社、中華人民共和国。
- 桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登。(校注) 1975. 寺社縁起(八幡愚童訓甲)・日本思想大系20. 519pp.
- 篠田耕一。1992. 武器と防具 中国編. 32pp. 新世紀社、東京。
- S.R.ターンブル(稻葉義明訳)。2000. モンゴル軍. 48pp. 新紀元社、東京。
- 佐藤鉄太郎。2005. 蒙古襲来絵詞と竹崎季長の研究. 480pp. 錦正社、東京。
- 鷹島町郷土誌編さん委員会。1975. 鷹島町郷土誌. 533pp. 鷹島町、長崎。
- 鷹島町教育委員会。2003. 鷹島海底遺跡 IX 8:1-5
- 鷹島町教育委員会。2002. 鷹島町海底調査 XIII 6:42-45

<sup>1</sup> 〒811-3103 福岡県古賀市中央二丁目13番1号 古賀市立歴史資料館

<sup>1</sup> Koga City Historical Date Hall. 2-13-1. Chuo Koga City, Fukuoka 811-3103 Japan